

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月1日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520147

研究課題名（和文）「組踊の系譜—朝薫の五番から沖縄芝居、そして『人類館』へ」

研究課題名（英文）Genealogy of Kumiudui - From Chokun's five masterpieces to Okinawa Shibai, and "The House of Man"

研究代表者

与那覇 晶子（YONAHA SHOKO）

琉球大学・大学教育センター・非常勤講師

研究者番号：30412860

研究成果の概要（和文）：「組踊の系譜」のプロジェクトは、琉球・沖縄芸能の近世から現代に至る通史的な大きなテーマである。2004年に開場した「国立劇場おきなわ」の劇場の形態、そして21世紀以降に創作された20作に及ぶ大城立裕氏の新作組踊まで視野に入れた研究になった。本研究の成果の一つは二回開催されたシンポジウムである。第一回「組踊から沖縄芝居、そして『人類館』へ」（2012年2月8日）と第二回「《劇場と社会》—劇場に見る組踊の系譜」（2012年3月1日）の両シンポジウムは、組踊と能楽、其々に優れた研究者當間一郎氏と天野文雄氏に基調講演をしていただき、民俗芸能、琉球舞踊、琉球音楽、シェイクスピアなどの研究者、国立劇場おきなわ芸術監督、沖縄芝居実験劇場代表等をパネラーとして招聘し開催した。一方、大城氏の10作の新作組踊上演は、朝薫が初めて冊封使に披露した1719年から現在に至る「組踊」の系譜を逆照射することになり、本研究は当初の目的を超えた発見をもたらした。

研究成果の概要（英文）： The “Genealogy of *Kumiudui*” project spans a wide range, considering the history of Ryukyuan/Okinawan performing arts from the early 18th century to the present. The project also covers the National Theatre of Okinawa, which was built in 2004, and 20 *Shinsaku Kumiudui* by Oshiro Tatsuhiro. One significant result of this project was the organization of two symposiums, attended by several eminent scholars of *Kumiudui*, *Noh*, folk theatre, Ryukyu-dance, Ryukyu-music, and Shakespeare along with the art director of the ‘National Theatre of Okinawa’ and the director of ‘The Okinawan Drama Experimental Theatre’. Toma Ichiro and Amano Fumio gave the keynote address at each symposium. In addition, Oshiro’s ten *Shinsaku kumiudui* productions have revealed some retrospective insight on the genealogy of *Kumiudui*, which brought unprecedented enlightenment beyond the first aim of this project.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：組踊の系譜、玉城朝薫五番、沖繩芝居、新作組踊、人類館、沖繩語（ウチナーグチ）、近・現代沖繩演劇、文化的アイデンティティー

1. 研究開始当初の背景

組踊の研究は近年かなり充実してきたと言えよう。沖繩学の権威伊波普猷著『校正琉球戯曲集』が1929年に出版されており、戦前から戦後にかけて脚本研究は手堅い。組踊が当初から口立てではなく戯曲として文書化された影響が大きいと言えよう。池宮正治著『琉球文学論』『沖繩芸能文学論』、當間一郎著『組踊研究』『組踊写本の研究』、畠中一郎著『組踊と大和芸能』、矢野輝雄著『沖繩芸能史話』『組踊を聴く』、犬養公之著『玉城朝薫の世界』、また板谷徹、池宮氏による戌の御冠船の記録『冠船踊方日記』の翻刻がなされ御冠船時代の組踊の詳細が論稿の中でも取り上げられつつある。一方、組踊を母胎にそのもどきとして誕生した沖繩芝居（琉球史劇、琉球歌劇）の研究書は組踊のような概論やテキスト研究は少なく、沖繩芝居論としてもまだ上梓されていない現状である。矢野輝雄著『沖繩芸能史話』の中に一部歌劇や近代演劇としての芝居に関する新聞資料を読み解いた背景が紹介されている。その他、よく引用される真栄田勝郎著『琉球芝居物語』は明治から大正期の沖繩芝居の状況が散見できるが、通史としては不完全である。昨今出版された大野道夫著『沖繩芝居とその周辺』は、新聞資料を基に歌劇の通史に取り組んでいるが、手法は池宮氏に類似する。また大城學著『沖繩芸能史論』には組踊と共に芝居脚本が紹介されている。他、『琉球芸能辞典』は、沖繩芝居の概要や写真を含め脚本も紹介している。

その他沖繩芝居役者によって書かれたのは大宜味小太郎著『小太郎の語やびらうちなあ芝居』、真喜志康忠著『沖繩芝居と共に』がある。戦前から戦後にかけて活躍した名優真境名由康の『真境名由康・人と作品』上・下巻、また同じく名優渡嘉敷守良を特集した『沖繩演劇の巨匠・渡嘉敷守良の世界』も発行されている。個別の沖繩芝居劇団については稲垣真美著『女だけの「乙姫劇団」奮闘記』などがある。主に口立てで創作され上演されてきた沖繩芝居は、当初からテキストの刊行が難しい中で現在にいたっている。それゆえに芝居映像（DVD）は一部業者によって販売されているが、芝居テキストの出版が立ち遅れている。昨今までインターネットで沖繩芝居を閲覧できるサービスが沖繩県によって提供されていたが、それが現在削除されている。ウチナーグチ（沖繩語）で成り立つ組踊や沖繩芝居が、沖繩アイデンティティーの中

軸にあることは無視できない。2009年2月19日、ユネスコが琉球諸語は消滅の危険性のある独立言語と認定した。危機言語に数えられているウチナーグチだが、組踊から脈々と流れている系譜を検証することによって琉球古語を含む朝薫五番から現代ウチナー芝居『人類館』にいたる沖繩の集団的無意識の集合性としての総合芸術・大衆芸術の本質に迫ることができると考えた。

2. 研究の目的

2001年に日本演劇学会の大会で「組踊の系譜—組踊から琉球歌劇へ—般若面の登場」と題して研究発表した。すでに「道成寺」との比較研究がなされている「執心鐘入」の系譜として歌劇「恐ろしき一夜」、そして同じく歌劇「菖蒲の由来」の比較検証をした。それらの作品の構造の類似性や変容、違いを通して実は明治以降の日本への同化の過程がこれらの作品から如実にうかがえることを明らかにした。それ以来組踊の系譜として近代以降の沖繩芝居を掘り下げたいと考えてきた。それは真喜康忠が戦後創作した「落城」の中にも組踊「忠孝婦人」の糸の場面が取り入れられている点からしても、琉球・沖繩芸能史の中で滔々と流れている組踊の系譜がどのように沖繩芝居の中に継承されたのか、すわなち、どのように近代の琉球語/沖繩語口語芝居、琉球歌劇が誕生したのか、またどのような影響関係や変遷が見られるのか、それが主な研究目的である。一方で2004年に国立劇場おきなわが開場し、大城立裕氏による新作組踊20作品が上梓された。思いがけないことだが、新作組踊の上演が朝薫五番から現在に至る沖繩演劇総体を逆照射し、伝統と現代をあぶりだすことになった。18世紀初頭から現在に至る沖繩の舞台芸術の特性をまとめることを目標に据えた。ただこれは膨大なテーマでその端緒に終わったばかりである。

3. 研究の方法

70、80代中心の「琉球歌劇保存会」の保持者や沖繩芝居関係者のインタビューを録音録画し、また毎年母の日や敬老の日を中心に上演される沖繩芝居公演の録画、インタビューを実施した。また沖繩芝居テキストやDVDの収集をして作品分析に取り組んだ。一方で大城立裕氏の新作組踊を取材、録画し、観客アンケートを実施した。沖繩、名古屋、LAの舞台の比較検証は人間国宝の地謡や立

役、演出家へのインタビューも試みた。「新作組踊」は、1719年に組踊が舞台化されて以来この間の沖縄演劇の集大成として捉えることが可能だと考え、全ての大城新作組踊を観劇し批評すると共に、関係者のインタビューを続けた。観客反応の比較検証は一つの方法である。組踊の系譜としての沖縄芝居の誕生や展開には大和から沖縄に輸入された歌舞伎や壮士芝居や新派もまた丁寧に検証し、沖縄の実際の舞台と比較検証しなければならないが今回はそれには取り組めなかった。近代の歴史書を読み解く中で、沖縄内部で新聞社を筆頭に沖縄の誇りをかけた知的戦略が組踊上演や沖縄芝居誕生の背景にあったことがわかった。伊波普猷、東恩納寛淳、大田朝敷が1903年の「人類館事件」以降、沖縄人の誇りを取り戻す知的仕掛けをし、琉球語の誇りを語り、組踊への関心を向けさせたことが大きなインパクトになっていることが新聞からも読み取れた。表象が政治・経済・文化の大きな潮流の中にきらめく花としてあることの事例を資料は示している。集団的民族の無意識、意識の夢としての演劇や芸能を見据える時、当時の社会全体の位相を見る必要がある事例である。これらの自らの歴史の根の捉え返しの文化潮流、さらに組踊の系譜としての琉球史劇や琉球歌劇への歴史的背景の掘り下げとテキスト分析に取り組んだ。この過程で劇場の系譜、変遷に取り組んだ。ちょうど御冠船踊りの復元舞台の再現が2011年5月15日に実施され、現在の四間四方の張り出し舞台などの問題が課題として浮かんできた。「国立劇場おきなわ」の日本や沖縄社会との関係性における劇場の問題提起だと捉え、マメにゲネプロも見るようにした。2010年に組踊がユネスコの世界無形文化財として登録されることになったことが組踊の様式への掘り下げを後押しすることになったのは確かだろう。加えて『冠船踊方日記』などから新たな知見を得た復元舞台が四間四方の屋根付きの張り出し舞台で再現されたのである。従来の額縁舞台と異なる舞台空間に馴染めない身体と所作があり、しかしそこに立体的なリズム感が起こっているのも確かである。試行錯誤する『組踊』の公演だが、新作組踊の舞台化が、従来の組踊の様式の掘り下げを促した形になっているのが現状である。詞章の研究、その掘り下げ、また演技・所作様式の変容もたどることができた。しかしそれは今後もっと掘り下げられるべき課題である。

4. 研究成果

この研究が通史的な大きなプロジェクトだったということに思い至る。本課題の成果は、『組踊に見る劇場の系譜』（2012年3月11日）と「組踊の系譜—組踊から沖縄芝

居、そして『人類館』へ」（2012年2月8日）の各テーマで沖縄県立博物館・美術館でシンポジウムを開催したことだと言えよう。2011年5月、「国立劇場おきなわ」で上演された御冠船踊の世界、戌の御冠船の上演台本に基づく復活公演は、四間四方の張り出し舞台で、三方から観客が舞台を見る形態にはなっていなかった。北表、南表、橋掛かりという出入りと立体性の面白さは目を見はったが、資料に見える三間四方ではない。解説を読んでも納得のいかない張り出し舞台を導入したことが気になった。それで翌月日本大学芸術学部で開催された日本演劇学会で「劇場に見る組踊の系譜」のテーマで研究発表した。それを契機にさらに沖縄で「劇場と社会」のテーマで専門家の先生方を招聘し、5時間に及ぶシンポジウムを開催した。基調講演は日本における能楽研究の第一人者、演劇学会会長の天野文雄氏である。2つのシンポジウムの概要は冊子にまとめた。

思いがけないことに国際学会で3回大城立裕氏の舞台芸術作品について発表することになった。2010年、ミュンヘンで開催された IFTR/FIRT: Cultures and Modernity の大会テーマを基に「さらば福州琉球館」を取り上げた。ディアスポラ的で流動性をもった脱清人の生き方を現代に照らしてみた。大城作品が中国の福建省で上演された国際的な舞台公演で、中国人役者とのコラボレーションがなされたことを含め、アジアを取り込んだ斬新さが、近代の琉球をとりまくグローバルな地平を浮かび上がらせた。二重言語性の琉球・沖縄の表象のありようが沖縄芝居にも踏襲されていることも意義深い。また大城氏の新作組踊が伝統芸能を含め沖縄の舞台芸術全般を再活性化させていることは確かだ。大阪大で開催された IFTR 国際学会でそのことを論じた。さらに早稲田大学で開催された「復帰40年沖縄国際シンポジウム《これまでの沖縄学これからの沖縄学》」（2012年2月29日—31日）でアメリカ、日本、沖縄の研究者4人のパネルで

*Shinsaku-kumiudui: Theatrical
Intersections Okinawan/Japanese Identity
Construction*

のテーマで2時間のシンポジウムを構成し、司会・発表をした。参加者は John D. Swain, 鈴木雅恵、そして Wesley Ueunten である。

この発表のユニークさはアメリカの視点と日本の能やシェイクスピア能、そしてジェンダーの視点から組踊や新作組踊が捉えかえされたところにある。Interperformative の演劇概念が新作組踊にも網羅される論であることは確かであろう。その意味において新作組踊についてのフォーカスは沖縄の芸能

史の弁証法的統合の現在としての位置づけになると言えよう。その点、当初の予定からすこしずれたが新作組踊を対象化することによって、より開かれた演劇概念を取り込むことができた。沖縄の伝統演劇と現代演劇双方に普遍的な演劇概念が適応できる。

Interperformativity, Multicultural aspects, Cross-cultural/Intercultural approach の観点から今後の研究はもっと深められていくと考える。

具体的な「組踊の系譜」としての「沖縄芝居」の検証は、作品テキストは歌劇を含め追跡できた。その一部を論稿にまとめた。しかし組踊から琉球史劇への系譜は資料収集にとどまった。例えば「忠孝婦人」から森山薫作「大川仇討」、大城立裕作「春秋大川城」そして真喜志康忠作「落城」まで今後その系譜をまとめる予定である。

三年間に実施したアンケートやインタビューなどのまとめは今後の課題として残された。また「人類館」は、研究代表者が1982年、英語に翻訳されたテキストを使ってアメリカで演出した作品ゆえに思い入れは深い。シンポジウムで「人類館」の研究者を招聘することができなかった。今後の展望として「沖縄演劇論」をまとめたと考えているが、戦後沖縄演劇を見据える時「人類館」は中軸にあり続ける。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① 与那覇晶子、《組踊の系譜》琉球歌劇「伊江島ハンドー小」一縁、情、肝心の世界『組踊の系譜一朝薫の五番から沖縄芝居、そして『人類館』へ』(「組踊の系譜」プロジェクト、シンポジウム記録集) 2012年3月、83-92、査読無
- ② 与那覇晶子、「パネルディスカッション～しまくとぅばは今」『喜劇ウチナーグチ万歳』パンフレット、2011年9月、12-28、査読無
- ③ 与那覇晶子、「花染の手布～遊女(ジュリ)の表象について」『花染の手布』舞台公演パンフレット、2011年7月、2-7、査読無
- ④ 与那覇晶子、「画期的な沖縄芝居“多幸山”」『華風』5月号、2011年、26-29、査読無
- ⑤ 与那覇晶子、「沖縄芝居役者の踊り、歌詞解説」『華風』5月号、2011年、24-25、査読無
- ⑥ 与那覇晶子、「てんさぐの花」『華風』5

月号、2010年、10-13、査読無

〔学会発表〕(計14件)

- ① 与那覇晶子、”Oshiro Tatsuhiro’s *Shinsaku Kumiudui*: Revitalization of Okinawan Performing Arts” (Pannel Session: “*Shinsaku kumiudui*: Theatrical Intersections Okinawan/Japanese Identity Construction”) (Organizer & Chair & Panelist) International Symposium ‘Remembering 40 Years Since Reversion: Okinawan Studies Until Now, Okinawan Studies From Now On’, International Conference Center & Ono Memorial Hall, Waseda university, 2012年3月29-31日
- ② 与那覇晶子、シンポジウム「劇場と社会—劇場に見る「組踊」の系譜」(コーディネーター) 沖縄県立博物館・美術館講堂、2012年3月11日
- ③ 与那覇晶子、シンポジウム「組踊の系譜—組踊から沖縄芝居、そして『人類館』へ」(コーディネーター) 沖縄県立博物館・美術館講堂 2012年2月8日
- ④ 与那覇晶子、「近代沖縄芸能の母胎《辻遊郭》」(招聘講演) 那覇市歴史博物館主催、2012年2月4日、那覇市歴史博物館
- ⑤ 与那覇晶子、「From Tradition to Contemporary: Genealogy of *Kumiodori* in Modern Okinawan Plays Called ‘Okinawa Shibai’”(“The modernization of theatre in Asian theatre in the first half of the 20th century”, Taipei meeting, Asian theatre Working Group of IFTR, 7-8 January, 2012, Guling Street Avant-Garde Theatre, Taipei
- ⑥ 与那覇晶子、シンポジウム「《八月十五夜の茶屋》の変遷—小説から演劇、そして映画の受容まで」(研究発表) 沖縄県立博物館・美術館講堂、2011年9月10日
- ⑦ 与那覇晶子、しまくとぅばの日制定5周年企画、喜劇「ウチナーグチ万歳」関連フォーラム《しまくとぅばは今》(コーディネーター) 2011年9月3日、琉球新報ホール、沖縄
- ⑧ 与那覇晶子、「Oshiro Tatsuhiro’s *Shinsaku Kumiodori* : Revitalization of Tradition in Okinawa”FIRT/IFTR International Federation for Theatre Research Annual Conference Osaka (国際演劇学会), 2011年8月7-12日、大阪大学
- ⑨ 与那覇晶子、鼎談「花染の手布～遊女(ジュリ)の表象について」(司会) 国立劇場おきなわ小劇場、2011年7月17日
- ⑩ 与那覇晶子、「劇場に見る組踊の系譜」

日本演劇学会、2011年6月19日、日本
大学芸術学部、東京

- ⑪ 与那覇晶子、“Saraba Fukushu Ryukyukan (Goodbye Fujian Ryukyu Mansion) Inter Asian Theatre in Okinawa”, IFTR/FIRT 《国際演劇学会》2010年7月25-31日、
ミュンヘン大学、ドイツ
- ⑫ 与那覇晶子、「沖縄演劇に見るシェイクスピア《オセロー》の表象—沖縄芝居「按司と美女」と新作組踊「今帰仁落城」を中心に」沖縄外国文学会、2010年7月10日、琉球大学、沖縄
- ⑬ 与那覇晶子、“Beloved and Deserted Okinawan Madame Butterfly-Some Feature of Women in the Modern Okinawan Drama” IFTR/FIRT (国際演劇学会)、2010年3月17日、クアラルンプール
- ⑭ 与那覇晶子、「辻(遊郭)と沖縄の近代演劇」日本演劇学会、2009年6月27日、
大阪市立大学

[図書] (計1件)

- ① 与那覇晶子『組踊の系譜—朝薫の五番から沖縄芝居、そして『人類館』へ』—科
研課題番号：21520147に基づく研究成果報告書(組踊の系譜プロジェクト、シンポジウム記録集) 2011年3月、彩優
印刷

ホームページ等

<http://geo.yuminuyu.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

与那覇 晶子 (YONAHA SHOKO)
琉球大学・大学教育センター・非常勤講師
研究者番号：30412860

《研究協力者》

鈴木 雅恵 (SUZUKI MASAE)
京都産業大学教授

天野 文雄 (AMANO FUMIO)
大阪大学名誉教授、日本演劇学会会長

當間 一郎 (TOMA ICHIRO)
沖縄藝能史研究会会長

幸喜 良秀 (KOKI YOSHIHIDE)
国立劇場おきなわ芸術監督

高江洲 義寛 (TAKAESU YOSHIHIRO)
平成組踊塾塾長、音楽家、歯科医

狩俣 恵一 (KARIMATA KEIICHI)
沖縄国際大学教授

板谷 徹 (ITAYA TORU)
沖縄県立芸術大学教授

新城 亘 (SHINJYO WATARU)
琉球音楽研究者

玉城 盛義 (TAMAGUSUKU SEIGI)
沖縄芝居実験劇場代表

伊良波 さゆき (IRAHA SAYUKI)
沖縄芝居役者

吉田 妙子 (YOSHIDA TAEKO)
沖縄芝居役者

前田 舟子 (MAEDA SHUKO)
琉球大学・人文社会科学研究科・日本学術
振興会特別研究員 (PD)

伊野波 優美 (INOHA YUMI)
琉球大学・人文社会科学研究科・比較地域
文化博士課程後期院生

Mazzaro Veronica
琉球大学・人文社会科学研究科・比較地域
文化博士課程後期院生